

北前船とおひなさま

平成29年2月制作

◆開催にあたって

最上川河口に位置した酒田は、古くは平安時代より交通の要所となり、江戸時代には河村瑞賢が整備した西廻り航路によって「商人の町」として繁栄します。米俵は山のように倉や湊に積まれ、江戸・大阪などからの名産品をぎっしりと積んだ弁財船（北前船）が次々に湊に入り、酒田商人たちのもとに品物が運ばれてゆきました。その中に、豪華な雛人形がありました。酒田をはじめ、山形県内には古い雛人形が数多く保存されていますが、これは西廻り航路を通じ、江戸・京都からもたらされた品々なのです。

200回目の開催となる当企画展では、これまでに収集されたさまざまな雛人形のほか、昨年新たに仲間入りした「田中家のお雛様」も初展示しております。お雛様のやさしいほほえみを眺めながら、湊に北前船の帆柱が林立した、江戸期の酒田を想像してみてください。



(写真：田中家雛人形「立ち雛」)

◆古代の酒田

出羽国がつくられた奈良期～平安期、この頃すでに酒田は「港」としての役割を持っていました。今から約1100年前の平安時代前期、醍醐天皇の指示で制作された『古今和歌集』に、初めて最上川が登場します。

「最上川のぼれば下る稲船のいなにはあらずこの月ばかり」 (詠み人知らず)

当時出羽国に赴任した役人・宮人が、この歌を詠んだと考えられています。平安時代にはすでに最上川が広く知られていたと言えるでしょう。

『古今和歌集』から200年後、西行(1118～1190)の『山家集』には、以下のような歌が記録されています。

「最上川綱手曳くとも稲船のしばしが程は碇おろさん」 (崇徳院)

「強く曳く綱手と見せよ最上川その稲船の碇をさめて」 (西行)

罰を与えようとする崇徳院に、ある人物は許しを請いますが、「最上川の稲船を留める碇のように、その願いを聞き入れるのはしばらくやめよう」と言います。西行はそれを聞いて「碇を引き上げ、稲船を強く曳く腕をご覧ください(怒りを鎮めて話を聞いて下さい)」と返します。

崇徳院と西行が最上川流域に来た記録はありませんが、舟運はもちろん、川舟に縄を結び上流に引っ張る「船曳き」が行なわれていることを書いています。

この最上川の歌を詠んだ西行の没後500年に合わせ、有名な松尾芭蕉が「おくのほそ道」へと旅立ち、最上川流域で数多くの名句を作るのです。



写真「最上川の曳き船」

(明治期撮影 撮影場所不明)

この写真は明治期に撮影されたものですが、舟に繩をくくりつけて上流に引っ張る様子は古代と同じです。この「曳き船」を職業とする人々（曳きこ）が、最上川流域には多く住んでいました。

◆ 今年は無後八百年 徳尼公伝説

酒田発祥の物語として「徳尼公伝説」が知られています。内容は以下のようなものです。

奥州藤原氏が滅亡する際、白馬に乗ったひとりの女性が三十六騎の従臣を従え、秋田、そして庄内に逃れてきた。この女性は奥州藤原氏三代・藤原秀衡の後室であり、四代目泰衡の母であった。女性は男の子を一人連れていた。この男の子は名を万寿と言ひ、泰衡の息子（つまり奥州藤原氏五代目）である。久保田（秋田）で白馬は死んでしまい、手厚く葬る。これがのちの白馬寺である。

その後、一行は秀衡が信仰していた羽黒山の麓、立谷沢地域に落ち着いた。日々奥州藤原氏の冥福を祈っていたが、奥州藤原氏を滅ぼした源頼朝が、羽黒山に黄金堂を造ろうとしていると聞き付ける。身の危険を感じた一行は、「宮野浦」に居住を移し、そこに庵を建てた。これは「泉流庵」と名付けられ、女性は一族の冥福を祈りながら余生を静かに暮らした。

そして、建保五年（1217）、女性は90歳で亡くなり、「徳尼公」と呼ばれるようになった。三十六人の家来たちは徳尼公の死後、宮野浦で廻船問屋を営むようになり、酒田の港を開いたという。そして、三十六人の家来たちは「酒田三十六人衆」と呼ばれるようになった。

このような伝説が、江戸時代以前から現在まで語り継がれています。しかし、はっきりとした資料が無く、この内容が史実かどうかはわかりません。徳尼公にお供した三十六人の遺臣たちの氏名もあきらかではなく、のちの豪商集団「酒田三十六人衆」と関わりがあるのかも不明です。

この徳尼公伝説が縁となり、酒田市と岩手県平泉町は交流を行っています。今年は無後公没後八百年となる節目で、記念行事も予定されています。

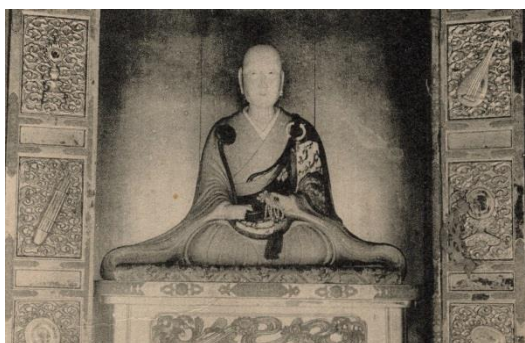


写真 「泉流寺 徳尼公木像」

徳尼公没後700年を記念して発行された絵葉書です。この木像と廟は、火事の被害にあった泉流寺のために、本間光丘が明和元年（1764）に再建したものです。酒田三十六人衆の子孫たちは、今も命日にあたる4月15日に泉流寺に集まり、法要を開いています。

◆酒田町の移転と町づくり

中世期の酒田は、現在の宮野浦地区に当たる最上川南岸に存在しました。約1,000軒余りの家々が集まっていたとされ、海運・舟運でにぎわっていました。逆に、現在の酒田の中心地に当たる最上川北岸には、家は150軒程度しかありませんでした。鶴岡・玉泉寺の住職が康正元年(1455)に書いた『玉湫軒記』には「西北は即ち逆沱浦、舟船都会之津也、三翼を浮べて、十州三島の珍貨を致す。すなわち陸海の珍蔵なり。」と、当時の酒田の様子が記録されています。「逆沱」という古い表記は、逆波が立つことを表しています。

しかし、最上川南岸は洪水や土砂の堆積などで地形が変わり、船着き場の便が悪くなってしまいました。そこで、大永年間(1521～1528、移転時期は諸説あり)に最上川の北岸、つまり現在の酒田中心部への移転を決定し、およそ100年の年月をかけて酒田の町をまるごと北側に移動しました。

この酒田町の移転を決定したのが“^{おとな}長人”と呼ばれる力を持った商人「酒田三十六人衆」です。

酒田町が移転をはじめた16世紀、出羽地域で力を振るっていたのは最上義光です。義光は最上川に存在した三難所(基点・三ヶ瀬・隼)を慶長年間に開削し、各地に船着き場を整備しました。これによって川船が通りやすくなり、最上川舟運が発展したのです。

しかし、戦国時代の庄内ではたびたび戦乱が起き、最上義光と直江兼続が戦った「出羽慶長合戦(慶長6年)」では、川北に移転したばかりの酒田の町が戦火に焼かれてしまいました。その際、町を再建したのは最上家の家臣、志村伊豆守光安です。町の長人を指導して焼け跡を整理し、新たに区割りしました。本町通りに問屋を並べ、河岸八丁と呼ばれる川沿いの地区には倉庫や船宿を設けます。また、道幅を広げ大火に備えるなど、現在の町割りの原形を作りました。

◆お殿様はどちらに住む？

江戸時代に入り、最上家は義光の死後に改易(領地を没収し身分をはく奪する)となり、庄内は譜代大名「酒井家」によって統治されることとなります。この時の酒井家入部(大名が領地に入ること)について、酒井家の記録『大泉紀年』の元和8年(1622)の記述にはこのように書かれています。

庄内には城が2つあり、住まいを鶴岡(鶴ヶ岡城)・酒田(亀ヶ崎城)のどちらにするか、老臣たちを御前に集めて相談を行いました。一人の家老はこう言いました。

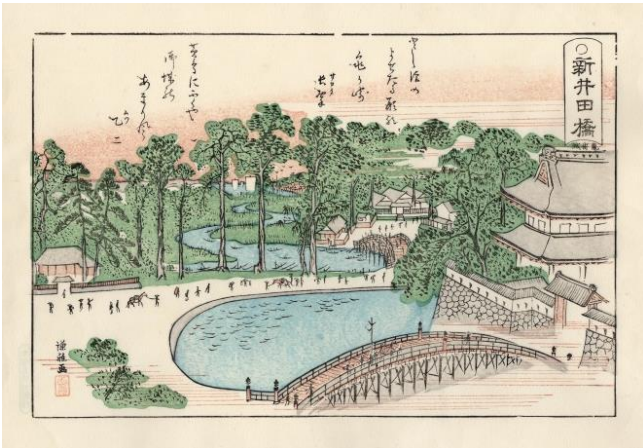
「鶴岡にするべきです。亀ヶ崎城は立派な城ですが、すでに酒田は諸国に名を知られた湊であり、廻船は日々やってきて、旅をする商人たちが集まっているにぎやかな町です。反対に鶴岡は城下も手狭で物も不足しています。このままでは後々衰退してしまいますから、鶴岡に住み、繁盛する城下町にしてゆきましょう。」(要約)

酒田町は既に酒田三十六人衆をはじめとした商人たちによって自治されていたため、酒井家は指導者を必要としていた鶴岡へ居を構えたのです。その結果、鶴岡は武士の町、酒田は商人の町として発展します。

さかたみやげ 木版酒田十景

『新井田橋』(復刻版)

この版画は文久年間(1861~1863)にお土産品として発行されたもので、10ヶ所の酒田名所が色鮮やかに刷られています。展示品は本間美術館による復刻版です。図中に描かれている太鼓橋と櫓は、亀ヶ崎城への入り口です。画面奥には新井田橋と酒田町奉行所が描かれ、行き来する人と馬が見えます。城には藩主の代理「城代」が住み、酒田を治めています。



◆江戸時代初期の海運は難点だらけ

西廻り航路が出来る前、船乗りたちは常に「遭難」「船の故障」「費用」に悩まされていました。すでに海運は発展しており、多くの船が行き来していましたが、各地の港同士はうまくつながっておらず、つぎはぎのような状態だったのです。また、旧来の輸送方法では、敦賀(福井)から琵琶湖を水上輸送し、大阪へと運ぶルートが取られていましたが、積み替えや倉入が何度も行われ、人手・費用・日数がかさみ、米は傷み、値段も上がってしまいました。

そのような時代、江戸の町では人口が膨れ上がり、米の需要が増していました。たびたび大火も発生し、幕府は財政難となっていました。そのため、主食であり、財源の元となる城米(幕府へ納める米)を、早く安全に江戸へ直接運ぶ必要があったのです。

◆河村瑞賢の西廻り航路整備

安全な海上航路が必要と考えた幕府は、河村瑞賢を抜擢し、航路整備を命じます。さて、整備とは一体どんなことをしたのでしょうか。

伊勢出身の河村瑞賢(1618~1699)は、若いころから才能を発揮し、大きな富を得た商人です。材木・土木関係の商売を行い、幕府の役人からの信頼も厚かったといいます。幕府の命を受け、寛文10年(1670)に奥州と江戸を結ぶ航路「東廻り航路」の整備に成功していた瑞賢は、次に西廻り航路の整備に着手します。

整備内容について、代表的な事例を見てみましょう。

- (1) 危険な所には水先案内人を置く(安全な出入航)
- (2) 幕府が直接船を雇い、責任を持った(船員の保障、運賃の削減)
- (3) 専用の米倉庫「瑞賢蔵」を造った(倉庫使用料の削減と、火災からの保護)
- (4) 良い船を使い米の積載量を制限した(船の安全の確保) …などなど

寛文12年(1672)4月、瑞賢が視察のため来酒し、町の代表者たちからもてなしを受けています。同年5月に米を積んだ船が酒田湊を出航、瀬戸内海、紀伊半島沖を進み、2ヶ月後に江戸に無事到着しました。この西廻り航路を活用した海運・舟運によって、酒田は各地の港とつながり、華やかな黄金期を迎えます。



写真 「河村瑞賢 銅像」

瑞賢は元和4年（1618）、現在の三重県伊勢市に生まれました。江戸に働きに出て成功し、人夫頭となって商売を始めました。その商才が認められ、幕府役人からの信頼も厚かったため、航路整備の命を受けます。航路整備に成功した瑞賢には、金三千両が与えられました。その後、瑞賢は鉾山開発や治水工事に携わり、元禄12年（1699）に82歳で亡くなりました。日和山公園には、市出身の彫刻家・高橋剛氏が制作した銅像（写真）が建てられています。

◆ 拠点となった酒田湊

酒田の町には弁財船（北前船）によって続々と米俵や名産品が運び込まれ、さまざまな商品を扱う「問屋」、来訪者のための「宿」、幕府米の管理を行う「蔵宿」などの業者が、商業の中心にいました。そして、湊周辺では「料亭・茶屋」がにぎわい、酒田の旦那衆や各地の船乗りたちを楽しませました。安政2年（1855）に刊行された『東講商人鑑』には、当時酒田にあった問屋・宿屋などが列挙されています。

江戸時代、自分専用の船で商売をする酒田商人は少なく、主な収入は売買や倉利用で発生する口銭（手数料）でした。流通の仲介を担当する「仲買」を行う商人が多かったのです。

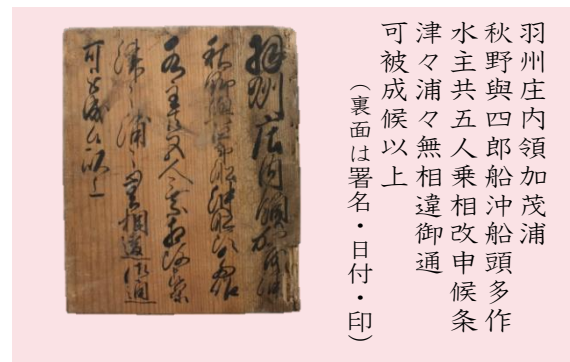


右上錦絵「諸国名所百景 出羽鳥海山」 二代目広重作（万延元年（1860）申年九月）



船絵馬「外川丸」（嘉永2年）※寄託品

酒田市内の神社には、このような船絵馬が多く奉納されています。その中には、航海中の船の安全を祈願するものや、海難にあった船乗りたちが無事に生還できたことを喜ぶもの、新しく船を造ったことを報告するものがあります。当時使用されていた船の外観がよくわかる、西廻り航路の貴重な資料です。



「船手形」（天保9年）

藩外に出る際に“身分証明書”となるものです。船頭の名前、乗員数が書かれています。関所で身分を確認された際は、これを出せばOKということです。

酒田に輸入されたもの、酒田（山形）から輸出されたもの

おもな輸出：米・青芋（麻）・紅花

農作物が中心。青芋は北陸の織物産地で縮となりました。山形を代表する名産品・紅花は、当時「最上紅花」と呼ばれ、化粧品や染色に使用される高級品として高値で取引されました。

おもな輸入：着物・工芸品や美術品

離人形はもちろん、振袖などの豪華な着物、工芸品が運ばれてきました。江戸時代、庶民が新品の着物を買うことはあまりなく、「古手（古着）」をリサイクルしていました。

もっと詳しく！『松竹往来』より 寛文12年の貿易品

山形	山形染帷子、最上紅花、青芋、最上あかね染、新庄銅
北海道～東北地方	松前干鮭（北海道）、津軽緒メ（青森）、塩越タラ（青森か）、秋田鮎（秋田）、横手馬（秋田）、能代材木（秋田）、石原白石紙子（宮城）、仙台ハマグリ（宮城）相馬紬（福島）、福島絹（福島）、会津筆（福島）
全国	越後蠟（新潟）、村上茶（新潟）、新潟塩曳（新潟）、新発田鱒（新潟）、能登鯖（石川）、加賀帷子（石川）、三国鑊（福井）、敦賀銘酒（福井）、越前奉書（福井）、宇都宮団扇（栃木）、西内紙（茨城）、下谷張キセル（江戸か）、錦袋円（薬・江戸）、浅草品川苔糟漬（江戸）、岐阜包丁・小刀・剃刀（岐阜）、美濃煎茶（岐阜）、高野墨（和歌山）、熊野節（和歌山か）、伊勢光沢白粉（三重）、宇治碾茶（京都）、稻荷山塩松茸（京都）、奈良油煙（奈良）、大和繰綿（近畿地方）、京都大阪大津堺小間物（近畿地方）、荒井塩（兵庫）、肥前唐津焼物（佐賀）
産地不明	鼻紙、小坂紙布（宮城？）、地廻たばこ、高原塩、石焼クジラ・ニシン、筋子、昆布、オットセイ（薬用）、塩鯨、鯉節、のし鮑、焦椒、鯨髯細工、かじか、海松、たばこ、からすみ、鷹の餌、大布物、書物、巻物

これらは当時の教科書『松竹往来』によるもので、末文には「是皆多以廻船運送之所也（これらはみな廻船がおおいに運んでくるものである）」とあります。港町である酒田には、諸国の名産品が集まっていたのです。

◆代表的な豪商

酒田の町には数多くの商人がいましたが、中でも力を持っていたのは「酒田三十六人衆」です。前述の『徳尼公伝説』に登場し、奥州藤原家の遺臣の末裔とされていますが、正確な話ではなく、伝説と考えられています。

酒田三十六人衆は町政にも深く関わりましたが、常に36人という人数がそろっていた訳ではなく、30人、26人という時代もありました。家々の入れ替わりも多く、その理由の多くは「家計不如意」、つまり「家計が苦しい」というものです。貞享3年（1686）に初めて36人のメンバーがそろいましたが、それから明治元年（1868）までの182年間、家が存続していたのは10家だけです。新しい家を選ぶ際は、酒田中心地である本町に住む問屋の中から、資産や家柄が吟味されました。

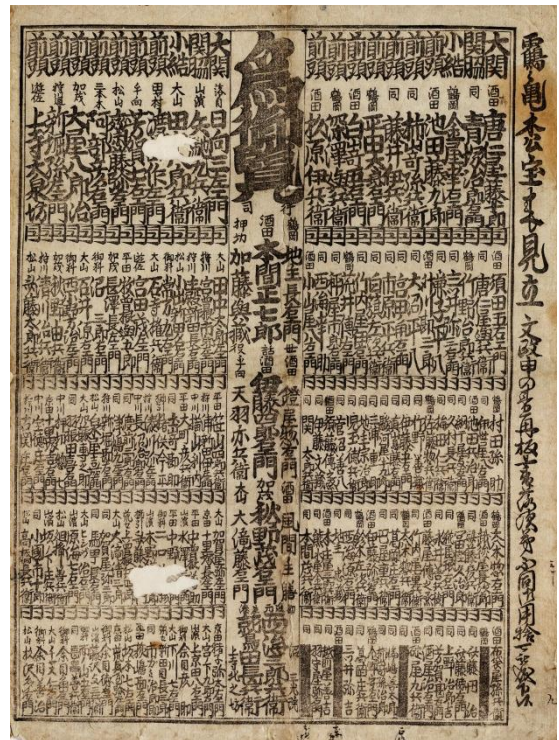
三十六人衆の中で著名な家柄には、日本一の大地主と称される「本間家」、旧邸宅が国指定史跡となっている「鑑屋」、『おしん』にも登場した「加賀屋」があります。特に「本間家」の本間光丘は町人でありながら“武士”でもあり、庄内藩の財政改善・砂防林づくりにも取り組んだ、日本一の大地主として知られています。



さかたみやげ 木版酒田十景『本町通景』(復刻版)

現在の本間家前の道「本町通り」を描いたものです。江戸期酒田町の中心地であり、ここに店を構える事が商人の憧れでした。図には以下のような文が添えられています。

『出羽の国酒田に城あり亀ヶ崎の城という此地東山道第一のみなどにして大小回船百艘とくろせきまで出入し四方の融通をなし人家透なく業をきそひ実に奉天の繁花天下便宜の地也…』



『鶴岡松宝来見立』文政7年(1824)

江戸後期に発行された、鶴岡(鶴)・酒田(亀)・松山(松)などに住む商人たちの長者番付です。東には鶴岡・酒田の商人が、西には松山・遊佐などの商人が列挙され、行事には本間正七郎、世話役には鑑屋惣右衛門・伊藤四郎衛門が割り当てられています。

◆お雛様と儉約令

酒田の商人たちは裕福ではありましたが、階級制度によって住まいや服装にはたびたび儉約令が出されました。『酒田三十六人御用帳』(本間家蔵)には、ぜいたくになりすぎた人々の暮らしが指摘され、「身分を守り質素古風ニ立戻り」と、さまざまな事柄に規制がかけられていたことが記されています。着物・嫁入り道具・お菓子・鉢植え・茶道具、そして住居についても華美が指摘されており、その中にはもちろん「雛人形」もありました。

天保13年(1842)に記録された文章には『雛并(ならびに)もて遊び人形之類ハ、八寸以上可爲無用候、右以下之分ハ粗末之金入とんす類之装束ハ不苦候事(八寸(約24センチ)以上の雛は不要である。それ以下の大きさの雛は粗末なもので、緞子(豪華な織物)の生地を使用していないものであればよい』とあります。

◆ 教養と俳諧文化

城下町鶴岡には藩校「致道館」がありましたが、武士ではない町人は身分上入ることはできません。町人たちは、読み書き・そろばん・礼儀作法などの基礎知識を「寺子屋」「家塾」で学びました。財力のある酒田の商人たちは、各地から講師を呼び、漢学・心学（道徳の教え）・華道などを学び、教養を高めていきました。

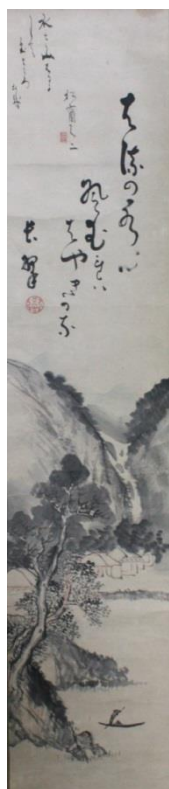
特に俳諧文化は発展し、松尾芭蕉が来酒した元禄2年（1689）頃には「蕉風」（松尾芭蕉風の句）が広まります。18世紀末になると、蕉門十哲・各務支考を祖とする「美濃派」と、常世田長翠による「春秋庵系」が同時期に流行し、酒田俳諧を二分しました。どちらも多くの酒田商人たちが弟子となり、金銭の援助を受けて発展します。

松尾芭蕉の来遊は酒田の俳諧に大きな影響を与え、それまで一部の職種・階級の遊びでしかなかった俳句が、町人に広まったきっかけとなったのです。



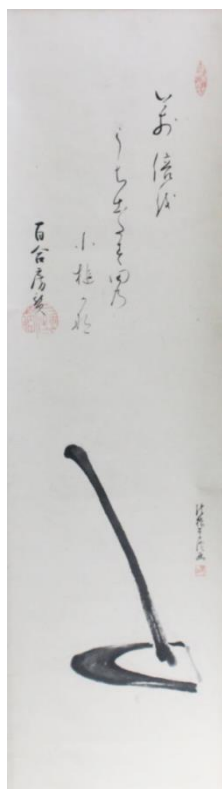
右上写真 「松尾芭蕉 銅像」

「俳聖」と呼ばれる松尾芭蕉（1644～1694）は、西行の没後500年（元禄2年・1689年）に合わせて奥の細道の旅に出発しました。大石田で詠んだ「五月雨をあつめて早し最上川」は非常に有名です。酒田に到着したのは出発から約2ヶ月後で、本町の医師・不玉、商人・近江屋三郎兵衛、役人・寺島彦助らと交流したことが「おくのほそ道」に記録されています。酒田滞在中に詠んだ句では「暑き日を海に入れたり最上川」が有名です。



「春の水心とむれははやくかな（長翠）」
「水と山春にしておくところかな（乙二※奥州俳人）」

「萬倍をうち出たす田の小槌かな」
※鉄の図は松山藩士・阿部李溪による



右 武長百合坊（以文）筆「鉄図」

（江戸中期～後期）

酒田米屋町の太物屋（綿・麻布屋）に生まれた武長百合坊（1734～1805）は、代々五右衛門と称していました。俳諧・書画に通じており、天明5年（1785）に蕉門十哲・各務支考の高弟である玄武坊が酒田を訪れた際に、仏頂（江戸の僧侶・松尾芭蕉の禅の師匠）の掛軸を預かります。これが縁となり、百合坊は玄武坊より酒田美濃派宗匠となりました。

左 常世田長翠筆「山水俳画」（江戸後期）

下総国（現・千葉県）に生まれた常世田長翠（1753～1810）は、江戸の俳人・加舎白雄の門に入り、蕉風の俳諧を学びました。長翠は、門人3千人とされる春秋庵の二代目宗匠となりましたが、すぐにその席を辞して奥州へと旅立ちます。

享和2年（1802）に酒田にやってきた長翠は、浄徳寺の前に庵を構えます。その後、本間家四代目・光道に庇護され船場町へと移り住み、酒田商人を含む多くの門人に春秋庵系の俳諧を指導しました。



常世田長翠筆 扇面

(江戸後期)

「風の行く 筋はみへけり 春の海 長翠庵」



「生花式」

「源氏生花記」

生け花教本 各種

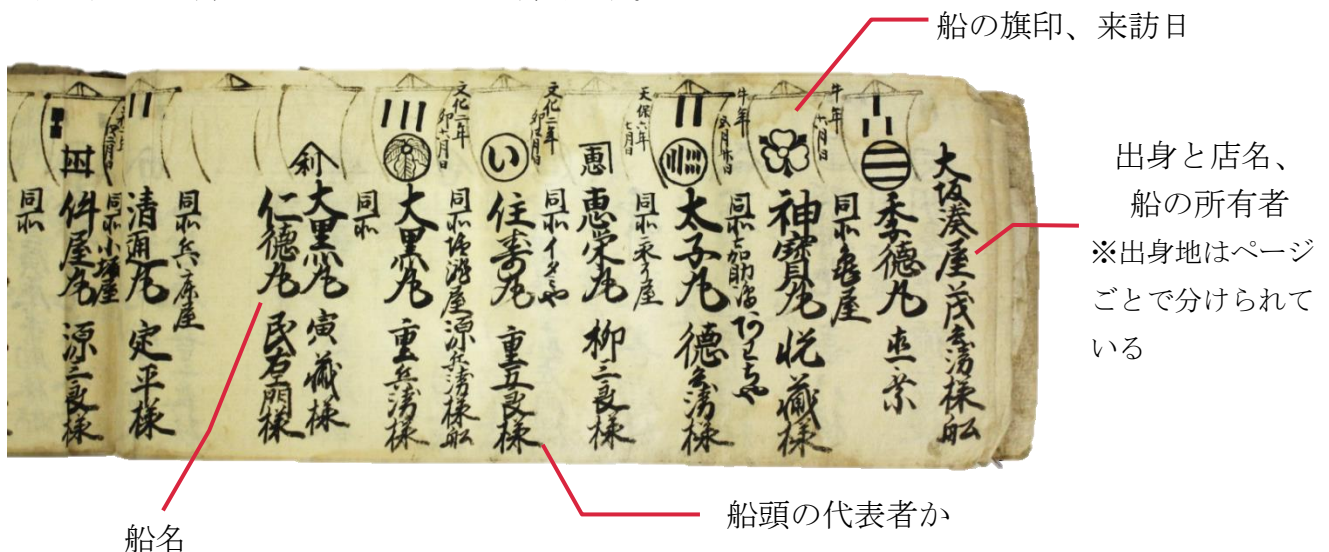
(江戸時代中期～後期)

現在は女性がたしなむ印象がある生け花も、江戸時代は酒田の旦那衆たちのたしなみでした。正保4年(1647)に雲照寺の橘玄周が池坊の皆伝となったのが酒田華道のはじまりで、町人たちに指導を行い広めてゆきました。

◆新収蔵 御客船帳

昨年、資料館では北前船資料「御客船帳」を新たに収蔵しました。酒田を訪れた北前船の出身地・船印・船主・店名などが記録されています。旧蔵者の家では、北前船の荷物・乗員を小舟に載せ、酒田湊内で輸送する「荷役」のほか、乗員たちを宿泊させる「宿泊業」も行い、手間賃を受け取って生活していました。

この「御客船帳」は、全国津々浦々の船が記録されており、西廻り航路の物流拠点となった酒田湊の様子を垣間見ることができる一級資料です。



船の旗印、来訪日

出身と店名、
船の所有者
※出身地はページ
ごとで分けられて
いる

船名

船頭の代表者か



「酒田湊日和山眺望図」(作者不明 江戸末期)

江戸時代の日和山周辺の様子を描いた絵図で、誇張や省略はありますが、船着き場周辺の街並みがよくわかります。今と変わらず、日和山にはたくさんの桜が咲いています。

◆北前船の終焉

明治5年(1872)、日本に「鉄道」が登場します。鉄道の誘致はブームとなり、またたく間に各地が線路でつながれました。庄内は誘致合戦で遅れをとり、酒田駅が完成したのは大正3年(1914)でした。山形から東京までをわずか数日で移動し、大量の荷物も運べる鉄道は、北前船に取って代わります。また、酒田港の整備も、新潟・函館などより遅く、洋式の大型船には使いづらい港のままでした。

さらには宮城県塩釜港から村山地域につながる陸路が完成し、最上川舟運にも打撃を与えたのです。需要が低下した「西廻り航路」は、大正5年に廃止※となり、約240年間の役割を終えました。 ※企業によって続けられていた定期航路が廃止となった



右上写真 「明治初期の船着き場の様子」(明治初期撮影)

この写真は現在の日和山下付近で撮影されたものと思われます。帆を畳んだ北前船が係留されています。北前船の時代が終わりに近づいている頃でしたが、開拓が進む北海道とのつながりが深まり、庄内の米や酒がつぎつぎに送られました。



最上川舟運 免許鑑札(複製)

明治9年・11年に、山形県から大石田の船主に発行された、艀船・小鵜飼船の免許証です。明治に入っても小鵜飼船は利用されましたが、鉄道の開通や他ルート開拓によって陸送が中心となり、最上川を通る船数は激減します。

◆「湊」から「港」へ

和船の時代が終わり、酒田港の近代化を待ち望む声が高まります。大正6年(1917)に、最上川改修工事が決定し、洪水対策・土砂流入防止の工事が行われます。河口にたまった土砂が取り除かれ、岸壁も設置され、大型船に対応した近代港湾の基盤がつくられました。河口が整備されて利便性が向上すると、荷物取扱量も増え、昭和4年(1929)には「第二種重要港湾」に指定されます。

後背地の大浜には工業地帯が形成され、軍事品の生産拠点となりました。戦後は「重要港湾」に指定され、昭和41年(1966)、大浜埠頭に一万トン岸壁が完成。昭和49年(1974)には「酒田北港」が開港します。現在は中国など対岸諸国向けの輸出がさかんに行われており、コンテナの取扱量も増大しています。

近年は風力発電の設置、大型客船の来航など、貿易以外の明るい話題も多く報道されており、市民の期待も増しています。今後、企業の進出・交通網の整備が更に進めば、より一層酒田港は発展していくことでしょう。第二の西廻り航路時代がやってくることを願います



大浜工場地帯遠景(昭和30年以降撮影)

大正4年(1915)、酒田駅と繋がる最上川駅(現・酒田港駅)が開通し、酒田港の役割も一気に変化しました。大浜では鉄興社(現・東北東ソー化学)などの工場が次々に操業を開始、合金鉄や樹脂、金属マグネシウムなどを生産しました。戦時中は軍需品生産の拠点になり、戦後は山形県唯一の貿易港として、さまざまな物資が輸出入されました。



酒田北港の開発(昭和60年撮影)

昭和49年、酒田の北側に新たに造られた「酒田北港」は、各地からやってくる貨物船のほか、大型客船や自衛隊の護衛艦もたびたび来訪し、物流を支えています。



日和山から見た現在の最上川河口

大浜にあった酒田灯台が日和山に移築され、シンボルとなっています。遠くには風力発電も見え、酒田港には小型～中型の船が、酒田北港へは大型船が入港します。

風景は大きく変わりましたが、いつの時代も港を中心とした街づくりが行われています。

◆新収蔵 田中家のお雛様

昨年、当館では市内在住の田中吉郎兵衛家より、雛人形の寄贈を受けました。寄贈を受けた雛人形は『田中家のお雛様』として保存し、今回の企画展、そして今後の展示でも市民の皆様にお披露目し、酒田の文化財として引き継いでゆきたいと思えます。



田中家は元禄期（1688～）より続く旧家で、昭和期までは酒造業を営んでいました。雛人形を収納していた木箱には、西廻り航路での交易をうかがわせる墨書きもあります。雛人形はどちらも江戸後期から明治初期のものと考えられますが、北前船時代を感じさせるお雛様です。

（写真 田中家での段飾り風景）



田中家のお雛様 内裏雛（1）



田中家のお雛様 内裏雛（2）

寄贈された雛人形のセットには2対のお雛様があり、どちらも江戸後期～明治初期のものと思われます。五人囃子や御所人形も揃えられています。なお、三人官女や仕丁は寄贈品には含まれていません。

押絵（明治期以降か）

寄贈品には美しい押絵も含まれています。この押絵は山車曳きの様子で、雛と共に段に飾りました。





「田中家のお雛様」は、木箱に収納され保管されていました。この木箱の中には墨書きが残るものがあります。一体どんなことが書かれているのでしょうか。

<p>辰三月 筑前屋 治郎左衛門</p>	<p>出羽庄内酒田舟場町 新問屋弥三郎殿 京六角堂前 二ヶ</p>		<p>太神宮御祓入 渡海安全</p>	<p>庄内酒田天正寺町 糺屋吉郎兵衛様 御荷物</p>	
------------------------------	---	--	------------------------	-------------------------------------	--

この他、別の箱のふたには「嘉永二…吉日」と書かれているものもあります。木箱の文字を読むと、「渡海安全」「京」の文字が出てきました。「嘉永二年（1849）」は北前船も多く酒田を訪れていた時期です。この木箱は京都から品物を運ぶ際に使われ、役目を終えた後、雛収納用として再利用されたものと思われます。「田中家のお雛様」も、交易品と共に運ばれてきたのではないのでしょうか。

❀ 資料館のお雛様 ❀



橋本家のお雛様

「橋本家のお雛様」は江戸時代後期に製作された古今雛です。京都で作られたため、目元は弓なりにっており、上品な顔立ちです。

古今雛は江戸の人形師「原舟月」らによって18世紀後半に作られたのが始まりで、美しく精巧な作りの古今雛は大流行しました。



江戸製の古今雛

江戸後期に作られた古今雛ですが、京都製の「橋本家のお雛様」と比べ、目鼻立ちがくりっとしています。京都では細目、江戸ではぱっちり目のお雛様が多く作られました。また、東京と京都では、男雛と女雛の左右が逆配置になりますので、こちらの江戸製の雛は東京風に展示しています。



芥子雛

江戸時代中頃から流行した小さな雛人形です。豪華絢爛に進化し続ける雛人形は、儉約を推し進める幕府により大きさが制限されます。幕府の圧力に反発した職人が、細かな細工を施した芥子雛を作り上げました。贅沢品として人気でしたが、結局禁止されてしまいます。



享保雛

1716年から1736年の享保年間に最盛期を迎えた雛人形です。顔立ちは面長で、特徴はふっくらとふくらんだ袖と袴です。大型のものも多く残っており、高さ50cmを越えるものもあります。「享保雛」の呼び名は明治時代に付けられたもので、人形製作は明治まで続きました。



鵜渡川原人形

亀ヶ崎地区・大石家で作られる土人形を「鵜渡川原人形」と呼びます。江戸時代末期から作成され、柳行李や背負い籠に入れて手売りされました。一般家庭では、高価な雛人形の代わりに土人形を飾ることが多かったのです。現在も人々に愛される、温かみのある人形です。



立ち雛

雛人形のルーツとも言える、紙で作った雛です。平安時代には白紙で作った人形（ヒトガタ）を川や海に流し、無病息災を祈願する行事がありました。工芸技術が進歩し次第に人形が豪華になってゆくと、川に流さずに室内に飾る、現在のようない雛人形が作られるようになります。

